

拙堂會報

第18号

2025年6月1日発行

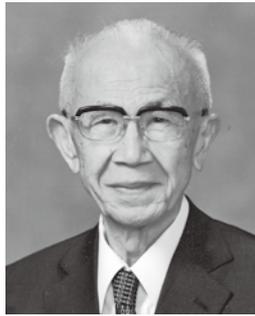
発行所
齋藤拙堂顕彰会

理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

人工知能(AI)を利用して漢詩文を 読んでみましょう 拙堂百六十回忌に平和を考ふる 加藤龍宗 2	第九回齋藤拙堂顕彰俳句・短歌 第八回齋藤拙堂顕彰小学生書道展 第九回齋藤拙堂顕彰吟道大会開催 拙堂顕彰会受賞の喜び 土井真次 5
ニューヨークの思い出 飯田俊司 3 「人材育成」について思うこと 海住禎人 4	齋藤拙堂との出会い 寺島栄一 12 令和七年度拙堂会総会報告 13

人工知能(AI)を 利用して漢詩文を 読んでみましょう

顧問 齋藤 正和



最近、私は人工知能アプリの一種「チャットGPT」を使って漢詩文の訓読、現代語訳ができるのと知って使い始めた。ほぼ間違いない結果が得られるように思う。時間的にも、ここに掲げた例を訳するのに五分もかからなかったように思う。皆さんにもご利用をおすすめしたい。ここに、拙堂が紀伊半島を一周旅行した時の紀

行文『南游志』から那智の滝を詠んだ詩を一首、このアプリで訳してみた結果を示します。

まず、パソコン上に次のように書く…
「次の漢詩を訓読し、現代語訳してください。」

那智山瀑布

匡廬水簾曾耳聞、那智瀑布今日擊。貴耳賤目我豈敢、我扶我眼懸翠壁。翠壁丹霞縹緲間、天傾河漢濯孱顏。奇態橫出難狀寫、詩手頻又不暫閑。有如虹懸蛟龍掛、激雷劈山驟雨快。落絮飄風雪漲空、帝唾飛珠仙墜珮。旭日射之光陸離、又現美人窈窕姿。吾畜兩眼六十歲、平生未見如此奇。名勝亦自有等位、論品不甘居第二。山有富士湖琵琶、瀑是那智可相比。嗚呼、今日人中誰是龍、雲將何處去相從。且看天下無雙瀑布水、一洗平生芥蒂胸。」と。

そうすると、パソコンの画面上に、全く待つ時間なく、次の訳文がスルスルと出てきます。

パソコン曰く…「ここに、その回答を示します。(ChatGPT:の答え)

この美しい漢詩文「那智山瀑布」は、那智の滝の壮大さと感動を詠った作品です。以下に訓

読と現代語訳を示します。

○訓読文

匡廬の水簾、曾て耳に聞けども、那智の瀑布、今まさに目に撃つ。

耳を貴び目を賤しむこと、我れ豈に敢えてせんや。我れ我が眼を扶りて翠壁に懸けんとなす。

翠壁と丹霞との縹緲たる間、天、河漢を傾けて孱顔を濯ぐ。

奇態、横に出でて狀に寫し難く、詩手、頻に又して暫くも閑ず。

虹の懸かるが如く、蛟龍の掛るが如し。雷を激して山を劈ぎ、驟雨の快きが如し。

落絮、風に飄りて雪、空に漲る。帝の唾、珠と飛び、仙の佩、墜つ。

旭日、これを射て光陸離たり、また美人の窈窕たる姿を現す。

吾が両眼、六十歳を畜い、平生未だ斯くの如き奇を見ず。

名勝もまた自ら等位あり、品を論ずれば第二に居るを甘んぜず。

山は富士、湖は琵琶、瀑是那智と比すべし。



会長 加藤 龍宗

拙堂百六十回忌に 平和を考える

嗚呼、今日、人中に誰か是れ龍ならん。雲は將に何れの処にか往きて従わんとする。且く天下無双の瀑布の水を看よ、一たび平生の芥蒂の胸を洗う。

○現代語訳

中国の廬山の「水簾の滝」はかねてから耳にしていたが、いま那智の滝を実際に目にした。「耳から得た情報は貴く、目で見たものは軽んじられる」などというが、私はそんなことはしない。この目をえぐってでもこの滝の絶景のある翠の崖に掛けておきたいと思うほどだ。緑の崖と夕映えの雲のただようあわいに、まるで天が銀河を傾けて、弱々しい顔を洗い清めるかのようだ。

その不思議な姿は、何かに例えることすら難しく、詩人として筆をとってもたえず言葉を探し、手が止まらない。虹が空にかかるようでもあり、龍が空に舞い上がるようでもある。雷が山をつんざき、激しい雨が降りしきるような迫力だ。綿毛が風に舞い、雪が空に満ちあふれるようにも見える。天帝のつばが真珠のように飛び散り、仙人の佩玉が空から落ちてくるようでもある。朝日が射すとその光はきらびやかに変化し、またまるで美しい女性が優雅に立っているようにも見える。

わしてこそ真の平和築かれむ

ひとりよがりの人国おそろし

龍宗

今年は大儒拙堂百六十回忌に当る、塔世山四天王寺墓前に香を手向けてみては如何でしょうか、きつと喜んでくれることでしょう。

戦後八十年の慰霊の夏を迎える、昭和百年の歴史を見ると前半の二十年は軍国主義の時代、日中戦争、太平洋戦争と国民を犠牲にした戦いに明け暮れ、二十年に終結、二十六年にサンフランシスコ平和条約の締結により占領軍から開放され独立の道を歩んだ、なんと苦せきの果て

私の目は六十年間生きてきて、このような奇景を見たことがない。名勝と呼ばれる地にもそれぞれ格付けがあるが、この滝は決して第二の座に甘んじるようなものではない。山なら富士山、湖なら琵琶湖、そして瀑布なら那智がその代表にふさわしい。ああ、今日この人の中で、果たして誰が「龍」となれるだろうか。雲はどこへ行ってその龍に従うのだろうか。さあ、この天下無双の滝の水を見よ。一度見れば、人生に積もった心のわだかまりがすべて洗い流されるのだ。」

皆さん、どう思われますか？

の今日であった、近年自然災害、疫病との闘い等で苦しんでいるが人の力による殺戮はなく一応平和な社会と云える、而し世界に目を向けると各地で紛争が起きている、目にあまることは大ロシアによる隣国への侵略である、それが許されるごとき事変が頻発に起き、最も恐ろしきは軍備の拡張が正統化されることである、又経済戦争が勃発し、先の見えない世界情勢でもある、拙堂が生きた時代を見てみよう、一八二〇年津に移り一八六五年にて没するまでの四十五年間、前半の二十年は学者として藩に仕え、遊学を重ね文人たちと交わり、四十四才郡奉行、四十七才督学と出世を重ね五十五才にて山莊を

求め津に拙堂ありと天下に知らしめた、良き人生であった、一八五三年五十六才の年になると米使ペルーの浦賀来航に始まり西欧勢力の圧迫により慌ただししい時代を迎える、一八六〇年桜田門外の変が起り幕藩体制の崩壊を迎える而しこの年拙堂は紀伊半島の旅に出ている、一八六四年長英戦争、蛤御門の変となり、孫の正熙が参戦後病死と身近に戦争を感じられる事となった。さしたる戦を経験することなく翌七月十五日没した。拙堂は約五十首の歌を詠ている、その中に平和を願い心豊かな一首がある、百六十回忌の時皆さんに詠って下さることを願っている。

ニューヨークの思い出

理事長 飯田 俊司



ニューヨークは世界の金融経済の中心地、多少危険だけど活気溢れる魅力的な街だ。私はニューヨークに二度長期滞在をした。一回目は研修のため、一九八〇年四月〜六月、二回目は業務のため一九八七年一〇月〜一九九二年六月で、二年間だけは家族帯同で、あとは単身だった。

初めてニューヨークに行ったのは一九八〇年六月で、見るもの聞くのも珍しく、暇を見つけてはマンハッタンの街を歩き回った。何時間もセントラルパークのベンチに座って、飽きずに行き交う人を眺めた。肌の色、眼の色、髪の色が様々、服装もコートを着ている人、半袖を着

しづけしな 斎藤拙堂

しづけしな 『わが山里は松蔭の』
月もろともにすめる心は』
しづけしな 『わが山里は松蔭の』
月もろともにすめる心は』

ている人まちまちで、まさに移民の国、多民族社会であることを実感した。ニューヨークは人種のルツボと言われるが、人種のモザイクと言った方が当て嵌まるようで、混じり合うことはなさそうだ。

治安は想像以上に悪く、駅や町中の公衆便所や地下鉄で人の乗っていない車両は非常に危険で被害に遭う人も多いと聞いた。ホテル住まいなので三食とも外食、日本食レストランにも行つたが、値段が高いので大抵はコーヒーションップかファーストフード店で済ませた。出される量は体格のいいアメリカ人向けなので、最初は食べきれなく、量に慣れて間食するようになったら太ってしまった。

家族帯同の時は、治安の良いマンハッタン郊外の静かな高級住宅地に住んだ。家々は芝生が生えた広い庭、そこには木が生い茂り、リスやアライグマが顔を見せ、道路の清掃も行き届いて非常に快適だった。

休暇には家族でナイアガラの滝やグランドキャニオン、モニュメントバレーといった雄大な景観を見物、ボストンやゲチスパークなどの史跡を訪ね、首都ワシントン、カリブ海のバハマなどにも行った。

生活面では戸惑うことも多かった。電気・ガス・水道・新聞などの支払いには慣れない個人小切手を発行せねばならず、庭の手入れを怠るとお隣さんから訴訟されることもあるとのこと

だった。また、長男が現地の高校に通学したので、宿題があると一度に日本語でやり、それを英語に訳すため度々徹夜に近い勉強を余儀なくされる苦労もあった。しかし英語を母国語としない生徒のために英語の補習授業を無料でやってくれるなど移民国家アメリカの懐の深さを感じた。

アメリカは多民族、多様性がイノベーション、

「人材育成」について

思うこと

株式会社百五総合研究所

海住 禎人



昨今、私の職業柄、企業訪問の際、「人材育成」についての話題が多くなっています。背景としては、慢性的な人手不足からなのですが、募集しても思うように人が集まらないのが現状で、それであれば、「社員の能力をもっと高めよう」

活力の源泉となって繁栄、発展し、世界の大国リーダーとして各国から尊敬される国であった、しかしながら移民を排斥し、多様性を否定するトランプ大統領のアメリカが世界に混乱を招いているのを見るにつけ残念でしようがない。いつの日か再び世界に尊敬されるアメリカになることを期待してやまない。

つまり「コストをかけてでも社員を育てよう」ということなのです。

弊社では、このような環境のなかで、階層別社員研修や人事関連諸制度の作成など、「人材育成」の分野においても、企業のお役に立てるよう尽力しているところです。

話は変わりますが、四月十三日（日）に開かれました、齋藤拙堂顕彰会理事会に出席した際、事務局から会報への寄稿依頼がありました。私で良ければと引き受けさせていただきましたが、さて何を書こうかと思ひ、参考に過去の会報を幾つか読んでみました。何冊かを読み進めるうちに、私にとっても興味のある記事が、目に飛び込んできました。それは、二〇二二年十二月一日発行第十三号の記事で、齋藤正和顧問が寄稿された、「拙堂を若い世代に伝える工夫」の一節です。

「拙堂は藩校有造館の督学として津藩が天下の「文藩」と称えられるように学問・文学を盛

んにした。文藩とは何か。単に学問が盛んだということではない。教養人即ち心の豊かな人、自然や人情の美しさに敏感で自然や人間を愛する人々を沢山育てる藩ということだ。それに加え、自身武士であった拙堂は理想の武士はどうあるべきかを説いたのであった」

この一節には、拙堂の考える教養人とはこういう人のこと、そして拙堂自身が上に立つ者としてどうあるべきかを説いたものであり、私は感銘を受けました。

前段の話に戻りますが、企業経営において「人材育成」は、大変な労力と根気が必要な重要事項です。単に業務知識、技術力、営業に優れた社員を育てるだけでは、企業の発展は望めません。

つまり、拙堂が説くように、道徳的特性や人間性・人間力が高い社員を、時間をかけて根気よく育てていく事が、強い組織を形成し、内外からの信用と信頼が得られるのであると思っています。

弊社は、「思いやり」「感謝」「努力」を基盤とした社員教育を行っており、社員が「やりがい」「働きがい」を感じる会社を目指しています。そして、この拙堂の教えを参考にし、今後も研鑽していければと考えています。

最後になりますが、このような寄稿の機会を与えていただいたこと、心より感謝申し上げます。

第九回齋藤拙堂顕彰俳句・短歌

齋藤拙堂顕彰の俳句、短歌の応募者は俳句四十八名、二百六句、短歌十九名、六十首であった。

十二月十六日選考会の結果、次の作品俳句十一名、短歌十名が選ばれました。表彰式は令和七年三月十六日、詩吟朗詠会とともに津市中央公民館の会場で行われました。

▼齋藤拙堂顕彰会第九回俳句短歌募集結果▲

俳句部門

齋藤拙堂顕彰会大会賞

掌てのひらに冬日とろりと入徳門

津市 池田 容子

選評 入徳門をくくるとき、柔らかい冬日が

さしていた。私の掌にもその冬日の感触。「とろりと」が冬日と入徳門をくぐる作者の気持ちを表し、適格な言葉。

津市長賞

明日を待つ夕日煌く代田かな

津市 倉田 敦

選評 代掻きを終えてあとは田植を待つばかり、その水面に夕日が落ちて来る静け

さ。この夕日はまた朝日となりこの代田を輝かすのだ。田植を待つ安堵感が漂い句の捉え方が大きい。

津市議会議長賞

洗はれて碑文字くつきり露けしや

津市 白木 ひろ海

選評 碑の文字がくつきりと鮮明に浮かびあ

がってきた。つくづくこの文字を改めて読みその碑文に感慨を深くする。露けしの季語がしっとりと作者の心にもしみる。

津市教育委員会教育長賞

伊勢鉄道カイロと定期ポケットへ

津高校一年 鈴村 春胡

選評 伊勢鉄道での通学、朝早いのでカイロと定期はいつもポケットに。作者の高校生になった新しい日々の習慣を生き生きと把握している。



佳作

神島の遠き三角鳥渡る

櫻木博文

こそばゆき音がどこかに春の川

冨永加代

二学期の通う児見守る拙堂碑

藪内純治

有造館金剛の露一雫

野田三枝子

津駅から灯り途切れぬ日短し

地白崇文

晩学の政治を学ぶ長き夜

宇田多香子

仲秋やささい踊り影のびて

北貞子

短歌の部

齋藤拙堂大賞

惚ふれど過ぎ去る時の古里に

拙堂翁の学びを思う

津市 臼井文一

選評

作者の古里一志郡三ヶ野は拙堂ゆかりの地 拙堂は当時三ヶ野にいた名医瀬

田貞斎と親しくたびたび訪れて詩会を開いている。わが古里と拙堂翁の学びを誇らしく思う。

津市長賞

晩秋の金木犀の残り香に

黄玉色の空を見上げる

津高一年 大高 凧 紗

選評

金木犀の残り香のただよう中ふと見上げた空はトパーズ色 青春のロマンとあこがれを詠んだみずみずしい感性と語句が美しい。



津市市議会議長賞

拙翁の訪ひし郷ゆく月ヶ瀬を

梅のにほひの春着に替へて

津市 鏡 康男

選評

拙堂には名著「月瀬記勝」がある。奈良の景勝地月ヶ瀬には今も梅が咲き誇る拙堂の詩句を思い浮かべながら春着に替えて梅を愛でゆく作者の心おどりが詠まれている。

津市教育委員会教育長賞

故郷の津に教育の充実を

説きし拙堂今に引き継ぐ

津市 田中穂波

選評

拙堂は藩校有造館の督学となり教育の充実を説き多くの俊英を育てた。津藩は文藩とたたえられその伝統は今も文教都市津に引き継がれている。津の教育の伝統を誇らしく歌い上げた。

佳作

安政の地震に崩れし大岩に

百七十年間逆さの地藏

津市 斉藤 宗幸

肌寒し借楽に立つ負けるものか

燃える紅葉の心強さよ

津高一年 入江 桜子

夜具千せば秋の夜長も心地よし

そうお日様と添い寝が出来る

津市 山岸 美智子

月ヶ瀬の梅花つぼみし溪谷に

早や菓作りのつがいのツバメ

大津市 森 永昌雄

清明の若葉濡らすは絹糸のように

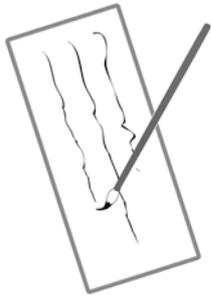
降る雨音は消えゆく

津市 種田 啓子

あかときの慈鳥啼く声こだまして

闇に包まる拙堂の墓碑

津市 岡田 正信



第八回齋藤拙堂顕彰小中学生書道展

第八回展も皆さん方のご協力のもとに無事に終了いたしました。応募数は昨年度よりもやや減少しましたが、それでも六〇〇点を越え、自己満足ながら大盛会の展覧会であったと自負しています。応募、ご協力をいただきました皆様方に心よりお礼申し上げます。



入賞者の方は次の通りです。

(齋藤拙堂顕彰小中学生書道展事務局 稲垣 武嗣)

齋藤拙堂大賞

津市立誠之小学校 六年 飛岡 芽生様

小学生の部

津市長賞

三重大学教育学部附属小学校 五年 杉田真央美様

津市議会議長賞

津市立成美小学校 六年 土性 菜尋様

津市教育委員会教育長賞

津市立南立誠小学校 二年 三藤 充喜様

中日新聞社賞

津市立南が丘小学校 二年 矢古島 慶様

中日新聞社賞

三重大学教育学部附属小学校

四年

桑名

優宇様

中日新聞社賞

津市立南立誠小学校

五年

中條

達貴様

中日新聞社賞

津市立北立誠小学校

六年

東

優羽様

特選

鈴鹿市立郡山小学校

一年

野村

藍央様

津市立戸木小学校

一年

山下

稜世様

三重大学教育学部附属小学校

一年

前川

沙穂様

津市立北立誠小学校

二年

井村

湊里様

鈴鹿市立玉垣小学校

二年

北川

心都様

鈴鹿市立玉垣小学校

二年

堀

雅陽様

松阪市立徳和小学校

三年

田名瀬

利子様

鈴鹿市立牧田小学校

三年

上杉

知奈美様

三重大学教育学部附属小学校

三年

佐藤

佳子様

三重大学教育学部附属小学校

三年

高倉

琉世様

津市立立成小学校

三年

谷川

凧様

津市立豊津小学校

三年

辻

颯太様

津市立南立誠小学校

三年

堤

麗愛様

三重大学教育学部附属小学校

三年

坪内

楓様

松阪市立掃水小学校

三年

山口

依愛様

津市立豊津小学校

四年

池畑

桃様

津市立西が丘小学校

四年

下井

彩由奈様

津市立上野小学校

四年

中川

史織様

津市立豊津小学校

五年

浅野

夏帆様

松阪市立第五小学校

五年

表木

望緒様

鈴鹿市立玉垣小学校

五年

尾崎

日菜子様

津市立村主小学校

五年

村主

知穂様

玉城町外城田小学校

五年

辻村

宗真様

津市立新町小学校

六年

石原

七海様

津市立北立誠小学校

六年

斎藤

彩花様

津市立千里ヶ丘小学校

六年

日名

子陽葵様

津市立豊津小学校

六年

舟田

実音様

津市立成美小学校

六年

松浦

由奈様

鈴鹿市立黒田小学校

六年

本屋敷

菜子様

鈴鹿市立玉垣小学校

六年

渡辺

紗矢様

中学生の部

津市長賞

津市立西郊中学校

三年

堀

柚葉様

津市議会議長賞

津市立久居中学校

一年

山下

絢音様

津市教育委員会教育長

津市立久居東中学校

三年

平手

綾華様

中日新聞社賞

松阪市立東部中学校

二年

堀田

朋希様

中日新聞社賞

津市立久居東中学校

三年

小野

祐佳様

特選

松阪市立東部中学校

一年

竹内

星七様

松阪市立久保中学校

一年

服部

友希乃様

鈴鹿中等教育学校

一年

渡邊

真央様

津市立みさとの丘学園中学

二年

芝原

由珠様

津市立橋北中学校

二年

中條

友翔様





三重大学教育学部附属中学校	二年	高島由衣乃様
鈴鹿市立平田野中学校	三年	今井 柚希様
松阪市立中部中学校	三年	松村 彩葉様
津市立西郊中学校	三年	松本 実華様
津市立南郊中学校	三年	水谷 稀汐様
津市立南が丘中学校	三年	矢古島 悠様
松阪市立東部中学校	三年	山本 涼太様

第九回齋藤拙堂顕彰

吟道大会開催

令和七年三月十六日(日)津センターパレス二階、中央公民館ホールに於いて、第九回齋藤拙堂顕彰吟道大会が主催・津市吟剣詩舞道連盟、共催・津市、後援・齋藤拙堂顕彰会によって開催されました。

前葉泰幸津市長他来賓の方々のご出席を賜り、ご挨拶の後、俳句短歌の表彰が行われ、選者好評の後、受賞八作品が朗詠されました。

受賞者の方からは作品が朗詠で披露されたことに変感激を受けて戴きました。

大会は江馬細香作「拙堂先生に呈す」を一同で合吟し開始致しました。加藤龍宗先生企画構成による「旅人拙堂但馬をゆく」と題した構成吟を始め、会員の吟詠・舞が演じられ盛会裏に終えることが出来ました。



書道の部

書道展で（第八回書道展）入賞されました、小学生、中学生の喜びの声

齋藤拙堂大賞

成美小学校六年

飛岡芽生

私は小学六年生で、今回の齋藤拙堂顕彰小学生書道展で大賞を受賞しました。この経験を通じて、いくつかの大切なことを学びました。まず第一に、努力の大切さを実感しました。書道は最初はとても難しく、何度も挫折しそうになりましたが、毎日練習を続けることで少しずつ上達することができました。また、書道を通じて感じたのは「集中力」の大切さです。筆を持って紙に向かう時、周りのことをすべて忘れて集中することで、美しい字を書くことができるのだと感じました。この集中力は、他の勉強や日常生活にも役立つと思います。最後に、受賞で

拙堂顕彰会受賞の喜び

きたのは、私だけの成果ではありません。いつも応援してくれた先生や家族に感謝しています。これからも努力を重ねて、もっともっと成長していきたいです。

津市長賞

西郊中学校三年

堀 柚葉

今回、このような素晴らしい賞に選んでいただいたことを大変嬉しく思います。書道は私にとって、心を落ち着け、集中する時間です。日々の練習では、筆を持つ手が震えることもありましたが、先生の指導を受け、少しずつ上達できたことが自信につながりました。今回の受賞は、これまでの努力の成果だと思えますし、さらに書道に対する興味と情熱が深まりました。この経験を生かして、今後も書道の技術を磨き、より良い作品が作れるように努力し続けます。ご指導いただいた先生や、支えてくれた家族に感謝の気持ちを伝えたいです。

津市長賞

三重大学教育学部附属小学校五年

杉田 真央美

津市長賞という素晴らしい賞をいただきありがとうございます。

私が書いた小学五年生の課題は、「有造館」でした。有造館は、江戸時代に津にあった学校で、拙堂さんが関わった学校だということを知りました。

私は、習字の練習が好きです。いつか、大賞をいただけるように、これからも練習をがんばります。



津市教育長賞

南立誠小学校二年

三 藤 充 喜

ぼくは、書道をはじめて二年がたちました。教室では、みどりのみをがんばりました。なぜかというとみの二かく目のほうがながいというのをなん回もまちがっているからです。さい後、書き終わったあとえらぶ時に、これにしよとえらんで名前をかきました。一か月ぐらいまってえらばれたのがうれしかったです。ひょうしょうしきの日しんぞうがどくどくとなっていました。しかも足がぶるぶるとふるえていました。でもひょうしょうされてベツトではね上がりたいくらいうれしかったです。



津市議会議長賞

久居中学校一年

山 下 絢 音

中学生になり初めて行書に挑戦しました。力をぬき筆先でとめる場所を先生から教わり、意識してたくさん練習しました。少しずつコツが分かり、作品として仕上げることができました。家族からは素敵な字が書けるようになったねとほめられてうれしく思い、たくさん練習を頑張ることができました。このようなすばらしい賞をいただけてとてもうれしいです。これからも流れるような字が書けるように練習します。ありがとうございます。



俳句の部

津市議会議長賞

白 木 ひろ海

朗朗とぎんえいしていただき とても光榮に存じました。
同席の高校一年生の方に感動し とても嬉しく エールを送りたいと思います
輝ける 若手俳人 うららけし
芽ぐむなる 俳人 高一年生
俳諧の 大樹目吹かむ 高一生



冠省

土井 眞次

再三の規定違反何卒ご容赦下さい、小生当地に住むこと通算五十年に達します、焼ける前の戦中と戦後に八年間在任永住を定めて、昭和五十八年三月より已でに四十一年、郷土と称しても異議はないと思います、詩題を「愛郷土」とした理由です。氣候温和にして植物の生育が良く教育文化も盛んな土地であり、拙堂先生が教

齋藤拙堂との出会い

茨城県土浦市 寺島 栄一

私と齋藤拙堂との出会いは、三重県津市の方々の歴史や伝統を大切にし、文化を発信する力が大きいところから来ている。徳川家康の最側近として仕えた藤堂高虎が忠義や礼節を尽くしたことに関心を持ち、毎年津を訪ねている。唐人踊りを見学し、藤堂高虎武者行列にも参加した。また齋藤拙堂先生小傳・年譜を見ると常陸国水戸藩の事柄が書いてあるのがわかる。水戸藩主徳川光圀とその後継者が大日本史編纂のため藤堂家を通じて情報収集をしようとしたことは、津藩が学問を尊

えて、新しい事への挑戦、少しでも習いたいと未熟な漢詩を続けています。

雨揚がりに筍が伸びて皮を落し樹々の葉は濃淡色々色を変へ、春が過ぎても鶯が鳴く好きな習字をやっていると帰る事も忘れ夜明けにもなった。

（*土井様は、津市高茶屋にお住まいで、現在百才だそです）



「愛郷土」

新堂解籜雨餘情
萬朶濃陰老鶯を聴
筆硯揮毫古墨を磨し
刀還更に遠し天明に到る

重し、歴代藩主が、儒学等の資料収集に力を入れ、藩の教育水準の向上を図っていたからだ。一八二八年に拙堂は茨城県出身の樺太探検家、間宮林蔵にも会っており、二人の間でどのような話が行われたか関心を持っている。また二松学舎大学創設者の三島中洲は、拙堂に学び漢文の素養を身につけた。三島は二期、私の郷里土浦の裁判所に勤めていた。このように茨城県と津は歴史上遠く離れていても深い関係にあった。私が拙堂と出会い感動したことは山水に対しての拙堂の認識である。山水に止まらず、梅の花の素晴らしさを月ヶ瀬で見て、その感動をみんなに伝えようとしたことにある。幕末水戸藩主徳川齊昭も梅を漢詩で詠んでいる。文人であり、儒学者であった拙堂のもとには吉田松陰が訪問するなど日本の夜明け

に拙堂の知見が活かされたことも多かったと思う。拙堂は「拙堂文話」の中で中国唐代を代表する文人韓愈を称えている。韓愈が儒教の正統性を継承する人物として孟子を焦点にしたこと、その孟子の教えを守り中興の祖として韓愈を取り上げている。駢儷体に異議を表し古文復興を唱えた韓愈は「拙堂文話」全六百四十五条中、百四十四条に登場する。第二位に登場回数が多いのは蘇軾、第三位は歐陽脩である。拙堂は唐宋八大家の一人である蘇軾から書風を学ぼうとし、歐陽脩からは紀行文の書き方について知識を得たと思われる。そうした書家であり、儒者であり、医学や海外事情を紹介した実績を学び、拙堂の教えが現代でも通じることを念頭に拙堂を顕彰していきたいと考えている。

令和七年度齋藤拙堂顕彰会 総会報告

令和七年五月十一日(日)アスト津・橋北公民館会議室において、第九回総会が開催され、各議題が満場一致で可決されました。以下、これを要約して報告します。

令和六年度事業報告

・拙堂會報 第十六号令和六年六月一日

第十七号令和六年十二月一日発行

・齋藤拙堂顕彰出張講座の実施

令和六年九月二十七日

高茶屋小学校四年生一〇〇名対象に実施

令和七年二月四日

養正小学校四年生三十名対象に実施

・拙堂塾の開催 場所 橋北公民館会議室

第一回 令和六年六月十六日

講師 椋本千江氏

「藤堂高虎のしつけ」

第二回 令和六年七月二十一日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩と和歌」

第三回 令和六年八月二十五日

講師 中村光司氏

「津市の文化人と史跡」

第四回 令和六年十月二十日

講師 齋藤正和

「拙堂の漢詩と和歌」

第五回 令和六年十二月

講師 桐田貴史氏

「企画展 藩校有造館と齋藤拙堂」

石水博物館では令和六年十一月二十三日か

ら令和七年一月十九日まで「企画展 津藩

校有造館と齋藤拙堂」の展示実施

第六回 令和七年一月二十六日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩」

第七回 令和七年二月二十三日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩」

第八回 令和七年三月二十三日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩」

・野外講座の実施について

「京都バス旅行」令和六年九月二十日

参加者 二十九名

頼山陽の山紫水明処、相国寺、昼食(俳句短

歌の吟詠)・南禅寺(山門は藤堂高虎が再建)

を見学

・齋藤拙堂顕彰会「第九回俳句・短歌」の募集

を令和六年十月一日〜十一月三十日に実施

応募作品:俳句 四十八名 二〇六句

短歌 十九名 六十首

表彰者 二十一名

・齋藤拙堂顕彰会「第八回小中学生書道展」作

品募集は、令和六年十二月二日から令和七年

一月十日に実施 小学生四七一点、中学生一

三三点合計六〇四点の応募があった。

作品展示会(六〇四点)は、令和七年二月二

十七日から令和七年三月二日

表彰式は令和七年三月二日に実施 齋藤拙堂

大賞(新設)・市長賞・市議会議長賞・教育長

賞・中日新聞社賞・特別賞を表彰した。

・齋藤拙堂顕彰第九回吟道大会と俳句・短歌の

表彰式は、令和七年三月十六日津中央公民館

で開催され、俳句・短歌の入賞作品(齋藤拙

堂大賞・市長賞・市議会議長賞・教育長賞)

が吟詠された。

・インターネット「齋藤拙堂顕彰会ホームペー

ジ」を更新した。

・齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業

は齋藤正和顧問中心に活動した。

・「郷土歴史博物館」の建設推進活動

・会員増強は、事業の拡大・新規事業の取組等

必要な資金調達を目的に会員の増強に取り組

んだが、入金結果は、個人一七〇人二三三口

四六五、六七〇円、団体三十八社四十二口四

二〇、〇〇〇円であった。

令和六年度決算報告及び監査報告

決算報告

収入合計	一、五八八、九九五円
支出合計	一、五八八、九九五円
事業費	七一〇、九三〇円
運営費	一二六、二二三円
繰越金	七五一、八四二円

監査報告

会計は適正に処理されている。

監事 國分昭男・米田堯光

令和七年度事業計画

- 拙堂會報発行 令和七年六月一日第十八号
- 令和七年十二月一日第十九号
- 齋藤拙堂顕彰出張講座の実施
- 拙堂塾の開催 場所：橋北公民館会議室

第一回 令和七年四月十二日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩」

第二回 令和七年六月十五日以後

毎月第三日曜日に実施する予定

- 拙堂塾野外講座「京都バス旅行」(令和七年十月十九日) 募集人員四十名

京都市方面(御所・天竜寺・金閣寺・銀閣寺)を計画

- 齋藤拙堂顕彰会「第十回俳句・短歌」の募集
- 令和七年十月一日～十一月三十日

- 齋藤拙堂顕彰会「第九回小中学生書道展」作品募集
- 令和七年十二月一日～令和八年一月九日
- 書道展 令和八年二月二十六日～三月一日

リージョンプラザ三階

- 齋藤拙堂顕彰第十回吟道大会と俳句・短歌表彰式
- 令和八年三月十五日頃

場所 中央公民館ホール

- インターネット「齋藤拙堂顕彰会ホームページ」の更新
- 齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業
- 齋藤正和顧問を中心に活動する。
- 津市に郷土歴史博物館の建設推進活動
- 飯田理事長を中心に活動する。

令和七年度予算

収入合計	一、七五八、六六二円
支出合計	一、七五八、六六二円
事業費	九九〇、〇〇〇円
運営費	二一〇、〇〇〇円
予備費	五五八、六六二円

会員の増強に関する件

事業の拡大・新規事業の取組などに必要な安定した資金の調達を目的に、会員の増強に取り組みます。目標 団体総数四十五先五十口、個人総数二〇〇人(二五三〇)

理事・監事役員の改選

任期二年満了による理事・監事を改選しました。

全員再任

会長	加藤 龍宗	
理事長	飯田 俊司	
常務理事	安村久仁男	会計
理事	種田 真山	総務企画
理事	水谷 忠文	総務
理事	稲垣 武嗣	書道展
理事	小川 直紀	書道展
理事	林 朝子	書道展
理事	藤貴 静扇	広報
理事	志田 行弘	広報
理事	伊藤 誠司	広報
理事	村主 英明	広報
理事	田矢 修介	広報
理事	海住 禎人	広報・会員募集
理事	山崎 満世	俳句短歌
理事	澤口 真理	漢文翻訳
理事	高岡 弘典	漢文翻訳
監事	國分 昭男	
監事	米田 堯光	
顧問	前葉 泰幸	
顧問	伊藤 歳恭	
顧問	齋藤 正和	
顧問	中川 禎二	